

ぼくが

理由

永井明

新宿医科大学

ぼくが医

者

が

新宿医科大学

ゆた

由

永井明

平凡社

永井 明（ながい あきら）

1947年広島県生まれ。医療ジャーナリスト。

主な著書に『仕組まれた恐怖』（講談社）『ぼくが
医者をやめた理由』（平凡社）『もしも病気になっ
たなら』（岩波ジュニア新書）など、訳書に『ボ
ロウド・タイム』（時空出版）がある。

新宿医科大学

発行日

一九九一年八月二日 初版第一刷発行
一九九一年二月一日 初版第四刷発行

著者

永井 明

発行者

下中 弘

発行所

株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五 郵便番号一〇二一
電話 東京（〇三）三二六五—〇四七一（編集）
（〇三）三二六五—〇四五五（営業）
振替 東京八—二九六三九

印刷所

東洋印刷株式会社

製本所

大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい（送料は小社で負担いたします）。

© Akira Nagai 1991 Printed in Japan

目次

プロローグ 7

医学進学課程 一年 15

医学進学課程 二年 35

解剖学実習 73

生理学実験 97

内科診断学 109

臨床講義 135

臨床実習 外来 149

臨床実習 手術場 169

臨床実習 病棟 189

卒業試験 211

エピソード 237

あとがき 240

装幀 平野甲賀

新宿医科大学

プロローグ

「なんで、そこをゼロにせにやあーいけんのか、わしにやあ、よおーわからん」

「困った奴じゃのおー」

その教師は苦り切っていた。

「布がはじまるところをゼロにすりやあ、えかろおーでえー」

「何べん言うたらわかるんじゃ。巻尺いうものはのおー……」

それでも辛抱強く説明しようとする教師の言葉は、ぼくの耳を素通りしていった。

「……ええか、わかったか」

「うんにゃ、わからん」

小学校三年、算数の授業で巻尺について教わっているときの話だ。教師は革製の円盤型ケースに入った大きな巻尺を実際に見せながら、その使い方の説明していた。

「この端に付いとる金具、ここをゼロとする」

その金具を固定している革の部分があり、数字が書き込まれた布が続く。布の端に表示されていたのは5という数字だった。「目盛りは0からスタートするのが自然じゃないか」。ふとそう思った。それほど強い疑問というのではない。「どうしてかな？」と軽く感じただけだ。だが、ぼくは手を挙げた。質問することはとりあえずいいこと、ひょっとすれば「おお、いいところに気づいたな」と誉めてもらえるんじゃないか、そんな甘い期待をしていたのだろう。

教師の反応は冷たいものだった。「なんて馬鹿な質問をするんだ」。実際彼が言葉に出したわけではないが、そんな雰囲気を感じとった。手を挙げたことをすぐに後悔した。後悔して引きさがれば、まだ可愛げがあるのだが、ぼくは意地になっていた。それからあとは、どう説明されても「わからん」を繰り返していたのだ。

あることがらについてイメージを描く。それがけっこう気がきいているんじゃないかと思う。そのぼくのイメージに対し人は、諸手を挙げて賛同とは言わないまでも、「なるほど」と感心するのではないか。いや、するはずだ。すべきだ、とひとり決める。もちろん根拠などない。現実には、まるっきり逆になる。

何か行動を起こすと、たいていそうなる。それなら、最初から手など挙げなければいい。誉められようなんて助平根性を持たなければいい。だが実際には、反射的にからだや口が動いてしまう。なお悪いことに、とりあえず議論が噛み合いますと、こんどは、「じつは、そんなことどうでもいいんだ」という思いが強くなる。自分から質問しておきながら、とんでもない話だが、なぜかそういう回路で回ってしまうのだから仕方ない。もちろん当時、このようなずれの構造を頭の

なかで整理できていたわけではない。できていれば、多少はましな対応をしていただろう。

手を変え品を変えする教師の説明に、いらだちだけが昂じてきた。

「わからん言うたら、わからんのじゃ」

ぼくは、手元にあった筆箱を教師に投げつけた。それは、顔をブロックしようとした彼の腕に命中した。蓋が開き、鉛筆や消しゴムが教壇のまわりに飛び散った。間の悪いことに、筆箱の中にあつた切り出しナイフが彼の手の甲を傷つけた。血が滲んでくるのがぼくの席から見えた。教室はしんとしていた。級長の輪島文子が素早く教壇に駆けより、ハンカチを取り出して包帯した。教師は、黙ったままぼくを睨みつけていた。

どうして気に入らないのか、なぜ腹が立つのか、なんとか伝えたいという気持ちはある。だが、どうすれば伝わるのか、それがわからない。

「先生が、ちゃんと説明してくれんけえ、いけんのんよおー」

半べそをかきながら叫ぶしかなかった。いたたまれなくなつて、教室の外に走り出た。行くあてはもろろんない。校内をうろろし、たまたま空いていた音楽教室のピアノの下に潜り込んでいた。

ぼくはいわゆる問題児だった。気短かで、自分の気に入らないことがあると、すぐに癇癪を起した。教師に対してだけではない。生徒同士でもしょっちゅう喧嘩していた。朝の廊下掃除のときだ。

「おみやあー、さぼったらいけんじゃろうがあー」

ぼくは、石川という女生徒に文句を言った。みんなが雑巾がけをしているのに、ひとり机についてこれからはじまる授業の予習をしていたのだ。彼女はぼくをちらりと一瞥しただけで無視、そのまま勉強を続けた。

「掃除をせえやあー」

「うるさいねえー」

ぼくはその言葉にかっときた。そして、手に持っていた雑巾を投げつけた。

「なにするんねー」

彼女は、立ち上がり、口をとがらせて迫ってきた。ぼくは思わず後ずさった。

「さぼるのはいけん、言いようるんよ」

「勝手でしょうが」

「なにー」

ぼくは、すぐそばにあった箒で彼女の頭を殴った。攻撃というより防御したという意識だった。反撃を待った。だが、彼女はなぜか泣きはじめ、自分の席に戻った。そして、ランドセルを抱え、そのまま教室を出て行った。

「教頭先生のところに行くように」

昼休み、教頭室まで呼び出された。そこには、石川の母親と、情けなさそうな顔をしたぼくの母親もいた。「娘にケガをさせた」と石川の母親が学校に抗議にやってきたのだ。ぼくの母親は授

業參觀などに来る必要はまったくなかった。それでなくとも、このようなことで、しょっちゅう呼び出されていたからだ。

「石川さんを箒で殴ったそうじゃね」

ぼくは、こっくりとうなずき、小声で付け加えた。

「掃除をさぼるけえ……」

「理由はまあ、いろいろあるんじゃないだろうが、暴力をふるうたらいいけんよ。しかも、相手は弱い女の子なんじゃけえ」

それは違うと思った。石川は弱くなんかない。体力的には完全にぼくのほうが劣っているし、神経の図太さだって彼女のほうがすごい。それにクラス内の勢力分布でも、かなり大きな派閥を率いている実力者だ。

「石川さんはケガをして寝込んでいるというじゃないか」

「こーんな大きなコブを頭に作ってます」

石川の母親は、頭より大きいんじゃないかと思えるほどのコブを両手で作ってみせた。おおげさな。嘘つけと思った。

「どんなふうに殴ったんね。ここに箒があるけえ、石川さんにやったとおり、わたしにもやってみんさいや」

教頭は箒をぼくに手渡し、ソファの真ん中で腕組みをした。母親のはらはらした気持ちが伝わってきた。ぼくは躊躇していた。

「どうしたんじゃ。やっぱり人を殴ることはいけんと思うじゃろう。同じようにやれと言われている、なかなかできんじゃろう」

なんだか誤魔化されたような気分になった。ぼくは手渡された箒を上段に構え、「えいや」と教頭の前頭部に振り降ろした。禿げている額が切れ、つーっと血が一筋眉間に落ちていった。母親は真っ青になって震えていた。

「申しわけございません」

彼女はひたすら教頭に頭を下げつつづけた。

教頭は、自分がやってみろと言った手前、ぼくの行為、それ自体については叱るわけにいかない。

「うーむ……これは痛いのおー」

なんとかそれだけ言った。石川の母親はあきれたような顔をしてぼくを見つめていた。だが、ぼくはめげなかった。石川が掃除をさぼったことが、そもそも間違っているという確信があったからだ。

「あやまりんさい……ええから、あやまりんさい」

母親は、ぼくの後頭部に手をやり、強引に頭を下げさせた。

同じクラスにもうひとりの問題児がいた。

佐東実。彼はぼくと同様喧嘩っ早く、いつも教師に対し反抗的な態度をとっていた。クラス対

佐東、クラス対永井、佐東対永井という図式があったわけだ。しょっちゅう喧嘩はしていたが、はぐれもの同士のよしみか、ぼくたちふたりはお互いの存在を認め合うところもあった。クラス対佐東の争いとき、ぼくは第三者の立場をとると感じる。

「きょうは、みんなにええ話を聞かせちゃろうと思う」

担任の教師は、とても嬉しそうな表情でそう言った。クラスみんなは興味津々、耳をすませた。

「佐東のことじゃが」

みんなの「ほおーっ」という視線が佐東のところに集まった。彼はなんだか面映ゆい顔をしている。

「昨日、学級水槽の金魚が一匹死んだじゃろう」

生徒たちはうなずいた。

「佐東は今朝、先生のところにインク壺を持ってきたんじや」

そこで教師は一息入れた。

「死んだ金魚を、そのインク壺に水を入れて墓に埋めちゃればいいんじやないか。そうすれば、金魚も嬉しいんじやないか言うたんよ。どうじや、ええ考えじゃろう」

輪島文子がつっと手を挙げた。

「佐東君は乱暴もするけど、ほんとは心の優しい人だと思います」

「うん、そうじやのお」

教師は満足そうにうなづく。他の生徒が続いて発言する。

「ぼくも、佐東君の意見に賛成です。みんなで中庭の池のそばに金魚のお墓を作ってあげるべきじゃ思います」

教室のみんなが拍手した。ぼくも拍手した。拍手しながら、佐東がうらやましいと思った。

「わしも佐東のように、教師に誉められること、クラスのみんなに受け入れられるようなことがあるんじゃないか？ それとも、いつまでたっても、どうしよーもない生徒のまんまなんじゃろうか？ クラスでひとりだけの問題児になってしもおーて……」

小学三年生には、なかなか重い課題だった。

「明は、ほんとほええ子なんよ。ただ、正義感が強すぎるけん、すぐに人と衝突してしまふ」

そう言ってくれる母親の言葉だけが唯一の拠り所だった。佐東のように心根の優しい部分をうまく表現できないのだとしたら、ぼくはとりあえず母親保証の正義派として生きること将来の展望を見出すしかないと思った。そして、ぼくなりの正義原則を立てた。弱いものいじめはしない。ずるいことはしない。卑怯な振舞いはしない……。

だがそれとて、身内の身びいき言葉から思いついたひとりよがりの決意にすぎない。パワーをもった正義、世間に受け入れられるものではなかった。中学、高校といろいろあがいてみたが、どう生きればいいのか、結局「わしにゃあー、よおーわからん」かった。